

第2回 山科の未来を語る懇談会

日時 平成30年10月24日(水) 18:00~20:00

場所 山科区役所 2階大会議室

委員

山科区自治連合会連絡協議会会長会副代表 内海 敏 委員
京都大学大学院工学研究科教授 川崎 雅史 委員
一般社団法人山科経済同友会会長 川中 長治 委員
山科区自治連合会連絡協議会会長会代表 住友 正歳 委員
京都薬科大学学生課長 高野 江里 委員
市民公募委員 高畑 咲季 委員
京都教育大学教職キャリア高度化センター教授 初田 幸隆 委員
京都橘大学健康科学部教授 日比野 英子 委員

配布資料

資料1 山科の未来を語る懇談会 委員名簿
資料2 第1回 山科の未来を語る懇談会における主な意見
資料3 「京都刑務所敷地の活用を核とする未来の山科のまちづくり戦略」(素案)
資料4 今後のスケジュールについて
参考資料 第1回 山科の未来を語る懇談会 会議録
(追加配布資料)
京都橘大学 「地域連携型教育プログラム」実績集
京都薬科大学 Fact File 2018
京都薬科大学 地域連携について
京都薬科大学 市民公開講座チラシ
「京の食6次産業化コンテスト」関連チラシ

1. 開会

事務局：

予定の時刻になりましたので、ただ今から第2回山科の未来を語る懇談会を開催させていただきます。各委員の皆様におかれましては、大変お忙しい中、御出席を頂きまして誠にありがとうございます。私は、本日の司会を務めさせていただきます、京都市総合企画局プロジェクト推進第一課長の西角でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

当懇談会は、公開で開催させて頂くこととしており、報道関係者及び市民の皆様の傍聴席を設けておりますので、御了承頂きますようお願いいたします。

本日は、次第の議題に記載しておりますとおり、第1回懇談会で、皆様から頂戴しました御意見等を踏まえ、事務局で作成しました「未来の山科のまちづくり戦略」の素案に対して、御意見を頂戴したいと考えております。

それでは、懇談会の開催にあたりまして、山本互総合企画局プロジェクト・情報化担当局長から一言、御挨拶を申し上げます。

山本局長、よろしくお願いいたします。

2. 総合企画局プロジェクト・情報化担当局長あいさつ

山本局長：

本日は、第2回の懇談会に際しまして、川崎会長をはじめ委員の皆様には、御多忙の所、御参加頂きまして誠にありがとうございます。前回の第1回懇談会の際には、未来の山科のまちづくり戦略の策定の趣旨や山科の魅力、例えば、1400年の歴史があること、安心安全のまちであること、地域の繋がりが大変強いまちであること、山科が置かれている現状、将来の見通し等について、各種のデータを交えながら説明をさせて頂きました。そして、まちづくりの方向性、ポイントとなります5つのエリアにつきまして、事務局から説明を申し上げまして、その中で、貴重な御意見、御感想等を頂いたところでございます。重ねまして御礼申し上げます。現在、京都市役所では、京都市議会にて昨年の決算が集中的に審議されております。先週、決算特別委員会市長総括質疑というものがございました。これは、議員さんからの質問に対して市長・副市長が答弁する場です。その場でも「京都刑務所敷地の有効活用について」という質疑がございました。その内容がさっそく京都新聞の夕刊の一面に掲載され、その見出しが「京都刑務所移転 前向き」というものでした。また、翌日の朝刊には様々な課題があるという記事が掲載されました。山科区役所でも、市民しんぶんの山科区版で懇談会の様子を情報発信しており、一般紙で大きく取り上げられたことと合わせて、区民・市民の皆様にも以前に増して関心を持って頂いたのではないかと考えております。本日は、前回お示しさせて頂いた5つのエリアにつきまして、その方向性や具体の取組例等も御説明申し上げ、委員の皆様のお意見を賜りたいと考えております。頂いた御意見を反映し、戦略の素案を作り、市会にも報告した上で市民意見の募集、という段取りを考えています。前回も申し上げましたが、この戦略は、市が作り、市だけが実践するというものではなく、区民・市民の皆様にも議論に入って頂き、ともに実践してまいりたいというものでございます。本日も忌憚のない御意見を頂きたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

3. 会長あいさつ

川崎会長：

山本局長からも話がありましたように、法務省の前向きな検討という記事が新聞に掲載されており、うれしい一報でした。この実現までには今後もいろいろな道のりがあるかと思いますが、私のように山科に住んでいない立場からしますと、前回の懇談会では、山科の魅力やポテンシャルについて、新しい部分に気付かせられました。また、それらをどう活かしていくのかについても積極的に御議論して頂きました。今回もぜひ、忌憚のない積極的な御意見を頂きたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

4. 議題

(資料3の説明の後、意見交換)

(1) 「京都刑務所敷地の活用を核とする未来の山科のまちづくり戦略」(素案)について

川崎会長：

今回もかなり盛り沢山の資料になっております。第1回懇談会での御意見、山科区13学区の自治連合会会長の皆様からの御意見も御紹介頂きました。また、活用案・素案について御説明頂きました。

まず、P1～13においては、まちづくりの方向性という、まちの現状、課題を大きく捉えており、P13に大きな目標が書かれています。少し広い視野での議論になります。P14以降は、かなり具体的に都市の構造、エリアの状況が詳しく書かれており、P19には活用案が示されています。早速に後半の議

論は難しいかもしれませんが、まずはP 1 3までの部分で、前回の議論を踏まえながら、山科の魅力、「まち」と「ひと」の現状、将来の見通しを踏まえた方向性について御意見を頂きます。その後、後半の議論をさせて頂きたいと思いますので、よろしくお願いいたします。第1回と重複する部分はありますが、委員の皆様からお気づきの点等ございましたら、御意見をください。

住友委員：

人口減少も課題ではありますが、空き家が増えている実態も踏まえまして、地域で子育てをする方向性をはっきりと示した方が良いのではないかと考えます。区域がありますので、それぞれの区域で検討していくことが良いのではないかと思います。空き家については、自治連合会も積極的に調査をしており、明確な数字が出るのは少し先になると思いますが、山科の空き家も随時解消されていくのではないかと考えられます。他には、駅前の活性化が大変重要かと思えます。先ほどの説明にもありましたように、ホテルの変化、店舗の変化等もありますので、魅力があれば山科に来て頂けるので、活性化もかなり進むのではないかと考えています。刑務所につきましては、色々と提案があるかと思えますので、それに則って取り組んでいけばいいのではないかと考えます。

川崎会長：

ありがとうございます。自治連合会会長の皆様からも、作成した戦略を着実に取り組んで頂きたいという御意見を頂いております。特にP 1 3（1）に「コミュニティの維持」とあるように、若い人がコミュニティを支えるということが大きなビジョンの柱になっています。非常に力強い御意見だと思います。

内海委員：

10月22日に時代祭があり、多くの観光客に来て頂いて賑わいました。その前日、前々日、山科では山科祭が開催されました。山科には多くの神社があります。各神社にお神輿があり、恐らく10基以上は出ていたと思います。各地で大変賑やかに宵宮や大祭が行われました。普段はあまり地域に出て来ない方でも、お祭りだけは出てくるというようなこともあり、コミュニケーションの1つになっています。これが地域力に繋がれば良いと強く感じた祭りでした。

もう一点、山科にもメインストリートが必要ではないでしょうか。京都の四条通は、大変きれいになりました。電柱が地中埋設化され、祇園の周辺もきれいになりました。このように魅力のあるスマートなメインストリートを、山科駅からこの榊辻周辺くらいまで整備することができれば、魅力的になるのではないかと考えています。

川崎会長：

山科祭を地域力として活用するという御意見でした。一般に、昔のお祭りは参加に閉鎖的な側面もありましたが、最近では子どもが少なくなり新しい住民にもオープンになっています。海外の方も楽しみに見に来られていますが、PR戦略による側面が重要であるように感じます。メインストリートの話は非常に重要です。自治連合会会長の皆様からの刑務所敷地への御意見の中にも、散策コースについて寄せられていました。このような公共的なプロムナードや公園は、都市の品格、顔をつくるような部分です。これというものを定めても、足りなければ土地を活用しながら再編していくことも必要です。四条通の例では、車線を減らしました。道やプロムナードを体系的に整えていくこと、これは非常に重要な御意見だと思います。大きな意味で、この会の結論のような御意見であり、これでまちの軸が繋がっていくように感じます。自治連合会の貴重な御意見も事務局で踏まえて頂ければと思います。

川中委員：

人口増減に関して、山科区の出生率は低くないものの、子どもが小学校に進学する頃には他へ転出してしまうということが紹介されていましたが、こちらについて教えて頂きたいと思っています。私自身、関

心を持ってその理由を考えました。その理由としては、雇用的な問題ではなく、子育ての中で教育レベルを上げたいということで、山科から転出されるのではないかと感じています。私が通院していた病院の先生から、子どもを御池通の学校へ進学させるために転居するという話を聞きました。教育レベルなど色々な問題で左右されるのではないかと感じています。

初田委員：

これは大変難しい問題で、理由を掘り下げて吟味する必要があると思っています。京都の公立のエリートコースと言われているものがあります。御所南、高倉小学校、御池中学校そして堀川高校というコースです。このような、公立でも任せられると信頼を寄せられる仕組みを山科でつくることができれば素晴らしいと思います。例えば、児童数がかなり減少している山階、西野、安朱小学校は、全て安祥寺中学校に進学します。これを小中一貫として教育の質を上げていくことができれば、非常に魅力的な地域になるのではないのでしょうか。私が気になっているのは、数字上では安心・安全なまちであるにも関わらず、区民感情ではそのように思われていないことです。京都市内では、昭和50～60年代、中学生を中心に生徒が非常に荒れた時期があります。この時期に特に荒れた地域として、山科や伏見区の醍醐、向島などの京都市周辺部が挙げられます。昭和40年代後半から50年代の人口増加に伴い宅地開発された地域です。古い地域に新しい人が入り、コミュニティは今では成熟期を迎えています。その当時は成熟しておらず、その中で子どもたちが様々な問題を起こしていたと考えられます。その印象が今も尾を引いているように思います。学校を訪問したり、校長先生方から電話での聞き取りをしたりしていますと、地域力がすごく強いという答えが多くあがります。地域でも様々な行事があり、子ども達のバックアップをして頂いていると聞いています。その反面、就学援助率が非常に高い学校があったり、一方で通塾率が市内中心部より高い率となっている学校もあり、大変教育的に関心が高い家庭が多くあるなど、それらの多様な実態から生まれるニーズに対し、中学校・高校が応えきれていないのではないかと思います。推測の域は出ませんが、これが、川中委員がおっしゃったことへの答えになるのではないのでしょうか。ニーズに応え得る公立の小学校・中学校・高校をどう整備していくのかということが、大きな1つの課題になるかと思います。その具体的な案については、後程お話させて頂きたいと思っています。

川崎会長：

教育レベルを地域で上げることや、小中一貫校のモデル作り・仕組み作りには色々な方法があると思いますが、大学も連携しながら、支えて行くことが必要だと思います。近年は、グローバルサイエンス、海外の学校とのやり取り等の取組もあります。京都大学では嵯峨野高校をはじめ、高校との連携をしています。高校の先生方にとっては非常に負担になっている部分もあるとお聞きしましたが、それをどのような形で大学がサポートできるのかという課題もあります。その問題は、初田委員に後程教えて頂きたいと思っています。

川中委員：

山科に住宅ができたのは、昭和30年代後半から40年代だったかと思っています。昭和40年代の山科の住宅は500万円くらいだったかと記憶しています。今、2800万円程度で、5～5.5倍になっています。住宅が古くなってきた時に、ローンが終わるのを機に他へ引っ越す人もいます。

川崎委員：

長寿命化等、色々な住宅のあり方が出てきていますが、昔に建てた住宅は更新時期を迎え、それが空き家の温床になっています。これは山科だけではなく、全国で起きている問題です。その空き家をどう使っていくのかということが重要です。住友委員から、空き家調査をして頂いているというお話がありました。地域によっては、本当に目も当てられないような、利用の仕方も先行き不透明という深刻な問

題になっています。現状はいかがでしょうか。

住友委員：

山階学区では、15の町内会に平均150～200軒の家があり、1町内3軒から6、7軒が空き家となっています。マンションだけの自治会もあり、マンションでも空き家が発生していますが、マンションの空き家は、低価格なので、そのマンションの住人が購入して人に貸すという状況があります。従いまして、マンションについては比較的、空き家は少ないように思います。戸建住宅では、家を建て替えて住んだり、別の方に住んで頂いたりということは少ないようです。

川崎会長：

今後ますます空き家問題は深刻になります。大阪の西九条等の商店街等では、空き家を解消しながらホテル活用していく事例があります。個々の空き家をホテルの客室と考え、その一つにフロントを設け、点在しているけれども全体でホテル利用をするという例や、ITなどのオフィス利用や、大学が利用しているところもあります。オフィス利用、観光利用を合わせることでうまく空き家を解消する方法があれば良いでしょう。山科は京都市内中心部に近い位置にありますので、PRの仕方によっては、ポテンシャルはとても高いと思います。このような有効な利用のアイデアを活用すれば比較的功を奏するのではないかと考えています。

初田委員からは山科のイメージがなかなか古い時代から払拭できていないという御意見がありました。実態は良いのに、イメージ戦略が追い付いていないことも課題です。

初田委員：

空き家率については、P6に東山区が22.9%という非常に高い数字が示されています。東山の場合は、P8の高齢化の進行を見ると山科を上回っています。これは1つのモデルになります。東山では空き家の対策にかなり取り組まれています。ただ、近くには清水寺、六波羅密寺等の色々な文化的施設がある地域の中で、しかも町家です。それは山科とは違います。参考にできることとできないことがあります。しかし、1つ先進的な事例として参考にしていくことは非常に大事だと思います。

川崎会長：

委員の皆様から具体的な御意見を頂いていますが、次に、私たちの子どもや孫の世代になっても山科が魅力的なまちであるための今後のまちづくりの方向性について、P14以降の話も含め、3つの柱立てに沿って次の議論に向かいたいと思います。5つのエリアの設定の妥当性、それぞれのエリアの方向性、具体的な取組例等について、特に重要な京都刑務所敷地の活用案について御意見を頂きたいと思います。

日比野委員：

京都刑務所敷地の活用案は、非常に総合的・複合的な計画で、P19の活用案が実現したら良いと感じています。どれもこれも描いていたイメージにぴったりのものです。実現できれば、他地域からもたくさんの方に訪れて頂けると思います。まずは訪れて頂かないと人を呼び込むことにならないと思います。これを元に観光も広がり、若い家族が山科の柳辻に来てくれれば、居住することにも繋がると思います。

恐縮ですが、この地域における京都橋大学の活動をまとめた冊子をお配りさせて頂きました。教員・学生と一緒に地域の皆様とこれまで取り組んできた活動をまとめています。P19の「子育て層・高齢者層など、区民の安心な生活を支える福祉・子育て支援施設」ということに関しては、冊子P16で紹介させて頂いています。看護学部の学生が授業の一環として醍醐地域の高齢者のお宅にお伺いしサポートしています。冊子P19に掲載の理学療法学科の学生による「みんないきいき幸齢教室」では、

健康体操をする活動をしています。冊子P21に掲載の「たちばな健康相談」では、看護学部の学生を中心に健康相談をさせて頂いており、高齢者だけでなくあらゆる年齢の方にお越し頂いています。今年の健康相談では、332名の方が来られました。

子育て支援については、冊子P11のように、音楽を通じた交流活動をしています。冊子P12では、児童教育学科の学生による「げんK i d s ★応援隊」の活動を紹介しています。理科実験企画として、子ども達と一緒に実験を一緒にやってみせるという活動です。京都薬科大学様も同様な理科実験企画をされています。三つ子の魂百までと言いますので、将来の理系の人材を育てる意味で小学校の時期から楽しい企画を作ることは重要だと思いますし、2つの大学がそれに協力できると思います。子どもにとって魅力的な教育が山科でできるのではないのでしょうか。先ほど初田先生がおっしゃっていたように、中学・高校へと育て、それぞれのレベルに合わせた授業のお手伝いができるのではないかと考えています。あるいはグローバル人材という面から言いますと、私の個人の考えですが、英語の教育が大事だと思っています。小中高の公教育の中でどれだけのことができるかわかりませんが、制限があるでしょうし、私学のように自由が利かないと思いますが、2つの大学が協力して、現場の先生方と大学の専門性を持った教員が連携していけるのではないのでしょうか。川崎会長からの話にもありましたが、京都大学では嵯峨野高校と連携されています。そのように、教育方法の研究を進めてモデルとなるような、教育方法の開発、共同研究や実践で御一緒できるのではないかと考えています。

今申し上げたのは、教育を活性化するためにプラスの上にプラスを重ねる方法ですが、教育現場では、先生方がたくさんの悩ましいことを抱えておられます。もっと小さな保育所や幼稚園の現場でも先生方は大層苦勞されている現実があります。京都市の「子どもはぐくみ室」もかなり御苦勞されていると思うのは、発達障害の子ども、それも軽度の発達障害の子どもが爆発的に増えていることです。1つのクラスに3、4人いる可能性が十分にあります。そのおかげで先生方は悩ましい状況にあります。先生方は、その子どもたちに特別な配慮をしつつ、クラスの全体の教育をどうするのかという問題を抱えておられます。橋大学ではこのようなことにも協力させて頂けることと思います。プラスを積み重ねることも重要ですが、先生方は疲労困憊されているので、先生たちが健康を崩すことに成りかねない現状があり、それを支えるということもできるのではないかと考えています。

川崎会長：

色々な活動の御紹介と、教育が地域の中に入り地域と一緒に支援していくという御意見や、発達障害の事例を御紹介頂きました。学校以外でも、放課後デイサービス等で民間の支援も多いと伺っております。国家資格があるわけではないので、豊富な経験を持っている人材を一本釣りの状態で雇用されています。かなり需要が高い施設ですが、民間に任せるだけでは不十分なので、大学の先生方の研究を基盤にしながらしっかりとした支援をしていかなければなりませんね。

日比野委員：

行政の方々も御苦勞されていますが、発達障害の御本人には様々な補助があるものの、家族にはありません。発達障害の場合は、親がある程度勉強されるとともに、親を支援することが大変重要です。それが今の行政では、現状、なかなか難しいようです。爆発的に増えている放課後デイサービス等の民間事業者では、とても難しいと思います。優れた専門性を持つ教育を山科でできないかと考えています。山科では保育園協議会、区役所からは保健師に出席して頂き、私も出席しますが、一緒に研修をしており、その研修が11月にも実施されます。このような中から大人のチームができてきます。現場の保育士、保健センターの保健師は、非常に優秀な方が多いです。当大学の教員も一緒になって研修します。保護者だけでは子どもたちを育てることは無理だと思います。この地域の大人がチームを組んで、できれば民生委員さん、

児童委員さんにもチームに入って頂くとさらに素敵になると思います。大人が手を繋ぎ、子ども達を育てて行く仕組みは、山科ならできそうな気がしています。先ほど、住友委員、川中委員、内海委員のお話を伺い、非常に心強いコミュニティの力を感じました。御所南小学校から堀川高校へのラインは、実は私が生まれた地域です。明治時代に小学校が出来た時に、住民がお金を出して作った経緯があり、非常に小学校区愛が強い地域です。山科も一番大事な気持ちや精神がある場所なので、それらを繋いで、保育所・幼稚園から小中高に繋ぐ仕組みを地域の力で作ることができれば、きっと若い人たちを呼び込めるように思います。それを象徴する施設が刑務所敷地にできてほしいと思います。

川崎会長：

具体的な教育レベルに関する議論について、初田委員からお話をお聞きしたいと思います。

初田委員：

発達障害の子どもが増えているというお話がありましたが、事実、その通りだと思います。1クラス40人のうち、2～3人の発達障害の子どもがいるのが平均的な数値かと思います。小学校への入学時には就学時健康診断を行い、子どもの様子を教員が見て、課題を詳細に観察します。保育所とも連携しています。その後、発達等に課題があると判断した場合は、その子どもの保護者と校長が面談をします。障害の程度によって総合支援学校に適しているという診断が出ますが、それ以外の子どもは、地域の小学校に入学します。その中で発達の課題に応じて特別支援学級（育成学級）に適している子どもは特別支援学級に入級します。また、その他にも普通学級に在席しているものの学習に集中できなかったり、文字言語による学習が苦手など、学習に障害のある子には、通級指導教室という仕組みがあります。ただし、通級指導教室は、設置されている学校とない学校があり、通級指導教室がない学校の子どもは、設置校まで通うこととなります。他にも、日本語が十分に理解できないニューカマーの子どももいます。学校には、そのような子どもに対して日本語指導をしていかなければならないという課題があります。そのような全てを学級担任が引き受けながら授業を成立させていかなければならなりません。それが、日比野委員がおっしゃった「教育が疲労困憊している」ということの大きな要因だと思います。そこに必要なのは人です。補助的に入って頂ける人として、大学や地域からボランティアでどんどん来て頂けると良いでしょう。もちろん教員の定数を増やすことができれば良いのですが、国レベルでは文部科学省が財務省に要求はしているものの予算措置には繋がっていません。そこは非常に難しいものがあります。先ほどお話しした御所南、高倉小学校、御池中学校と、堀川高校は、21世紀の社会を生き抜いていくために子どもたちにどのような力を付けていかなければならないのかという点で、繋がりを持ちながら先進的な取組を進めてきました。堀川高校の「探究科」では、自分で課題を見つけて、課題を追及して解決していく探究活動を早くから取り入れていました。このような授業においては生徒は教員を超えて行きます。例えば、私の在任校では中学3年でウナギの産卵はどこでされているかということを追及した生徒がいました。私は理科教員ですが、ウナギの産卵場所について詳しくは知りません。しかし、子どもはそれを追求し、フィリピン近くの海溝に産卵場所があるようだということに辿り着きました。探究することで教師の知識を超えていきます。教師は、指導ではなく支援するという立場になります。そのような時に堀川高校では大学と連携しながら、専門性の高い大学生や大学院生が指導にあたっていただき成果を上げることができました。これは、一つの成功例ではないでしょうか。山科には洛東高校があります。洛東高校が大学とどのように繋がっていくのかという視点が必要になるとだろーと思います。京都教育大学は、京都市と覚書を締結した上で小中教育について援助しています。来年、向島に小中一貫校が開校します。元々は向島では向島中学校1つだったのですが、人口増加によりその後向島東中学校が誕生しました。一方、先にできた向島中学校区では少子化の影響もあり、校下の向島二の丸小学校、二の丸北小学校、向島南小学校と共に施設一体型の小中一

貫校になります。向島のニュータウンでは超高齢化、少子化が大きな問題になっていたのです。山科でも、安祥寺中学校と3つの小学校の校区など、同様の課題を有する地域が見られます。施設一体型の小中一貫校をつくらなくとも、子どもにどのような力を育てて行くのかというところで、小学校と中学校がベクトルを合わせていく小中一貫教育をすすめていながら、高校へと繋ぎ、それを大学がバックアップしていくという仕組みができれば、魅力ある学校になるのではないかと思います。さらに、AI等による教育技術のレベルアップを図ればよいと思うのですが、経済的な側面から学校現場でそれらを実現するには少々時間が必要になると考えます。刑務所敷地にはリサーチパークの二番煎じになるかもしれませんが、地域を挙げて、新しいシステムで動くまちづくりをイメージしています。そのようなことを研究する施設がここに入ってくるとすれば、施設そのものを建て直すのではなく、中のインフラを整備して、教育の最先端を実現させることが可能ではないかと考えています。

川崎会長：

小中一貫校等で切り開くことも大切だと思います。私達は教育現場にいながら、なかなか関わることがなかったので貴重な御意見を初田委員からお聞きしました。基本的な質問ですが、小中一貫校は、今の学校が空間的に離れていても再編することで教育プログラムさえ繋がっていればよいのでしょうか。それとも小中一貫の建物は近い方がよいのでしょうか。

初田委員：

向島の例では、施設一体型ですので、1つの校舎に3つの小学校の児童が通いますが、小学生が通える範囲です。私がいた東山開晴館は六原にあります。最も家が遠い児童の住まいは南禅寺の手前です。歩いて通うには少し距離があるため、新たに市バスの路線を作って頂き、市バスで通学する仕組みを構築しました。施設一体型にすることも選択肢の1つだと思っています。安祥寺中学校区を例にすると、山階・西野・安朱の各小学校は1学年各1～2クラスです。学級編成を変えられないまま6年間を成長します。これが子どもにとっていいことでしょうか。やはり、2～3のクラスを設け、クラス替えして色々な子どもと集団になって成長していくことを好ましいとするなら、この3つの小学校とも規模としては小さいです。そうなるとう統合の問題が出ますが、これを行政主導で進めることは難しいと思います。地域の方は学校を核にして地域コミュニティがあると考えています。したがって、これは地域が選択することです。地域を1つにしていこうということになれば、統合ということが起こると思います。それと同時に中学校を繋ぐということをするのが、小中一貫施設一体型となるのです。これを実現するにはお金が掛かります。どこかの敷地に新たに1つの校舎を作るということではしか対応できません。そうではなく、今ある小学校と中学校が繋がりがながら、知恵を出し合ってよい仕組みを作ることもできるのです。もし施設分離型の義務教育学校にすれば、校長は1人になり、教育目標や経営プランも1つになり、小学校と中学校が繋がります。3人の小学校校長と1人の中学校校長でも、きちんと議論すれば1つにしていくことは可能でしょう。しかし、全国色々なところを回っていますが、小中一貫教育に取り組まれているところであっても、小学校と中学校の目指すものが合っているところは少ないと感じています。それをどのように整備していくかということが、まず課題だと思っています。

川崎会長：

教育マネジメントは奥が深いものですね。地域コミュニティの強さ、大学の活動、小中高の動向等も含めて、教育モデルの発信と、先端産業等色々なことを結び付けていくというお話でした。刑務所敷地は、空間的には10haありますが、各大学のセンター等を設置しても、10haすべてが埋まるわけではないと思います。密集的な戸建、団地が多いところで、防災のオープンスペース、緑の散歩道や自然環境というプロムナードがある中で、研究教育施設だけが壁で閉じられてしまうと、これはまた刑務所と同じこと

になってしまいます。学生のイベントについても、狭いところではなく、広いところでできるとよいでしょう。

富山大学は、富山駅前の広場で公開講義をしています。人が歩いているところで授業を大きなスクリーンに映し、イスを並べて授業を受けられるようになっており、市民も気軽に立ち寄って参加できる仕組みを作っています。音楽や表現等がオープンでできる場所があるので、そういうスペースをいかに賑やかに使っていくのか考えることも必要です。

金沢工業大学は大谷幸夫という建築家を作りましたが、ガラス張りになっているので、学生が実験をする姿等が見えるようにできています。学生の活動が見えること自体が活力になっており、大事な点だと思います。京都リサーチパークもそれで成功している1つの例だと思います。オフィスで働いている人の姿が五条通から見ることができます。透けて見えるまちづくりが大切だと思います。また、あまり単一化しないことも必要です。散策道やカフェ、商業施設、研究施設、ベンチャービジネス等、多様なアクティビティが必要です。京都リサーチパークであれば、ベンチャービジネスのオフィスラボがたくさん集まっています。トータルで全体の活力が見えるような多様性を10haの中に入れるということの価値は、たくさんあると思います。雇用の場を生むことも重要だと思います。京都市が持続的に発展していく、成長していく、または成長とまで行かなくても持続していくためにどのようにやっていくかという問題があります。海外ではサステナブルという言葉は古く、サーキュレーションという言葉がまちづくりで一般的に使われています。メリハリをしっかりと出すために、土地利用においても高度利用を考え、高度利用は建物を高くすることで隙間が出てくるので、公共空間を生みやすくなる面もあります。都市機能の集積であったり、生産力を上げたり、教育施設、子育て支援施設等の人の生産力を含めていかにメリハリあるものとなり、山科全体の中で刑務所敷地がどういう位置づけにあるのかを考えながら、敷地そのものの多様性とサステナビリティを考え、活力が見えるデザインにするような考え方が必要だと思っています。

医療先端都市を標榜する神戸市ですが、医療という一面だけではまちが単一的になり、生産性や賑わいを同時に創出していくことが重要になります。多様性です。それを統括する方法がIoTであったり、AIであったりします。また、プロムナード等の道の体系化、緑地の体系化等によって良い空間づくりができればいいと思います。

高畑委員：

市民として山科はとても暮らしやすい土地だと思っています。山に囲まれ自然は豊かで、交通の利便性があり、暮らすにも外に出て行くにも整っています。京都刑務所の敷地を活用できるのであれば、教育、産業、文化の機能を備えた公的なスペースは良いと思っています。全体の活力が見えるスペースがあれば、より多くの人の目が集まるのではないかと考えています。また、空間づくりがすごく重要だと思っています。例えば、先日まで、六角堂がコスメブランドと連携したイベントをしていました。学生の中でも話題になり、写真を撮りに行き、自分のカメラの画角の中に自分の空間を収めにしていました。六角堂の中に、ブランドのロゴが入った赤い提灯があるという異様な雰囲気ではありましたが、それに多くの人が集まっており、御朱印帳には20分程度も並ぶような賑わいでした。普段、学生は六角堂に行くわけではありませんが、空間が変わるだけで賑わうという事を実感しました。山科に新たな施設を誘致するにあたり、ただ新しいものを作るというだけではなく、その空間には、山科に暮らしている人も、外部からも人が来てほしいと思います。全体の活力が見える広いスペースとして防災機能を備えたオープンスペースという記載がありますが、先日の台風や大雨では、山科にさほど大きな被害はなかったとは思いますが、もし何かあった時に、「そこに行けば大丈夫」という広いスペースがあれば良いと思います。例えば、広い芝生のスペースがあるだけで人は日常的に集まると思いますが、自治連合会の方がおっしゃっている散策コー

スとして日常的に使うこともでき、災害等の有事にもスペースとしても利用できると思います。具体例としては、大阪駅の屋上に芝生のスペースがあります。買物帰りの方が立ち寄りたり、私たちも、友人と旅行の計画を話し合うのに集まれる良い場所がないので屋上の芝生へ行こう、と話したりします。芝生は憩いの場にもなり、もしA Iや新たな学校等ができた時に、無機質な建物が立ち並ぶ中にも芝生広場があれば、有効活用できるのではないかと思います。空間づくりの話を見せて頂いていますが、ただ空間だけがあっても意味はないということも同時に思っています。まちづくりはコミュニティづくりにも繋がると思うので、空間があるだけでなく、有効活用できるような働きかけがあれば、市民として参加しやすいと思います。大学生にも場所を求めている人は多くいます。色々な活動をしたくても、色々な連携をしたくても場所がないということが多くあります。このように10haもの土地があり、その中に何か空間があれば、また新たな使い方が生まれることと思います。今はなくても、10年、20年と続くといいと思います。

川崎会長：

若い方の感性は鋭く、伝統的な六角堂のようなところがプラスアルファをして発信できるものになり、環境を変えればPR・発信力を持つものになるということですね。山科祭についての御意見もありましたが、仕掛けをしていくことが重要という御意見です。大阪駅の芝生広場の他には、天王寺の「てんしば」も元々は環境の良くない公園でしたが、一挙に変わりました。芝生広場は色々な活動ができるので、重要な広場になっています。これも新しい感性だと思います。プラスアルファとしての感性が重要になってくると思います。

高野委員：

8月の第1回懇談会は、山科で働き、住む者として、改めて山科のことを考える機会となりました。最初に議論がありましたP13の目指す姿は、同じ意見を持っており、「住んで、働いて、訪れて、楽しいまち・山科」に加えて、「美しいまち」でもあってほしいと思っています。訪れた時の第一印象が重要ではないでしょうか。住友委員から駅前の活性化について御意見がありました。また内海委員の「魅力あるスマートなまちのメインストリートがあつてはどうか」という御意見については、私も同じ意見です。

P19の京都刑務所の敷地活用案についても考えてみましたが、広大な土地ですので御提案にあるように多様な利用を考えるべきかと思います。一つは基礎科学研究所をメインにしたまちづくりを考えてみました。人々の健康や福祉、幸福を考える時に、基礎研究は不可欠です。これまでのノーベル賞受賞者も、基礎研究の重要性を訴えておられます。基礎研究はすぐに結果が出るものではなく、成功するかどうか分かりません。ですが、研究者の方々がコツコツと積み上げて来られたことが、今の医療の発展や経済成長に繋がっており、今の社会を築いているのだと思います。京都にはたくさんの大学がありますので、大学や企業との共同研究が山科で活発になれば、国内外からの注目度も上りますし、山科への人の出入も多くなります。医療だけに限らず、農学部の研究と地元農家が連携して京都の食育推進プランにも取り組めるのではないかと思います。地元の食材や漢方を使った体に優しいレストランの経営、近隣スーパーと連携して販売もできるようなスペースも作れるのではないのでしょうか。広大な土地を研究に関係する人だけが利用するのではなく、研究所に隣接して科学未来館のような施設で子どもたちに自然や科学の不思議を楽しく学んでもらいたいと思います。研究所や大学をリタイヤした先生たちや、地元の農家の方に職員やボランティアとして協力して頂くことで、現役引退後の活躍の場にもなりますし、年齢を超えて交流する場となり、知識や知恵の継承にも繋がっていくのではないかと思います。視点は変わりますが、京都橋大学様と京都薬科大学では、IPE（多職種連携教育）を共同で実施しています。例えば、地域医療の共同開発センターを立ち上げ、医療に関わる様々な職種の方が集まってこれからの地域医療を推進していくた

めの勉強や研修の場となる他、工学部の方と連携して人にやさしい介護用品の開発をすることもでき、もちろん地域の高齢者の方も利用できる場を併設することが必要になってくると思います。また、医療や科学の他に、文化、芸術にも触れることができる施設や図書館があれば幅広く利用してもらえます。例えば、東部文化会館や山科図書館が老朽化していくので、移設して合併する方法もあるかと思っています。住環境についてP19にあります。こちらは余裕があればよいのではないかと考えています。周辺はマンションが多く、現在も建設が進んでいます。住環境としては周辺にあるもので十分ではないかと思われる。それよりも緑や自然を増やし、憩いの場が必要ではないでしょうか。高畑委員の御意見にもありました芝生広場については、地下を雨水の貯水槽にすることで緊急時の消火やライフラインが止まった時にトイレ用の水に活用するようなことができると思います。広大な土地を多様な方が利用することで、地下鉄の利用者も増えるのではないかと考えております。

本日は3つの資料を配布しています。「Fact File」は、2025年の超高齢化社会に向けて、京都薬科大学が何をして行けるのか、現在はどのようなことに取り組んでいるのかということについて、研究力・教育力・活力の3つに分けて御紹介しています。例えば、P4・5は、社会の皆様から、新薬の開発を短期間で行ってほしい、急増するアルツハイマー病等の認知症の根本的な治療法を確立してほしいというような声に対して、今、大学で取り組んでいることを御紹介しています。このような取組についても、先程申しました基礎科学研究所や地域医療の共同開発センターで関連分野の方々と共同で推進していきけるのではないかと考えています。

京都薬科大学の地域連携についての資料には、この2年間の地域連携の記録を記載しています。小学生向けの理科実験講座で子どもたちが実験する姿を見て、先程の科学未来館を考えてみました。

この12月に大学で開催する市民公開講座の御案内も入れております。地域の皆様に分かりやすく御説明できればと思っておりますので、ぜひ御参加ください。地域の皆様の健康のために、このような取組も続けて参りたいと思います。

川崎会長：

この地域をどのように多様化していくのかという中に、基礎科学の重要性を加えられ、基礎科学を柱にしながら、地域のレストランや地域の農家との結びつきも大事であると示してくださいました。科学未来館、芸術の問題も含めて、文化芸術センター等についての御意見も重要だと思います。これから施設はメンテナンス費が重なりますので、統一的なものにしていくことも1つの重要な視点だと思います。自然と緑で憩いが生まれたら、という御意見もありました。刑務所敷地の活用案に、基礎研究等の具体的なもの、そうした広がりをもどのように入れて行くかの検討が必要です。刑務所敷地の活用案のイメージについての議論に、さらにここから地域へどのように展開していくのかについても統括的に御意見を頂きました。非常に貴重な新しい意見やアイデアがどんどん出てきたことは本当にうれしい限りです。これについて、全ての議論をまとめる時間はないかもしれませんが、整理をしていきたいと思っております。

内海委員：

先ほど高野委員から農業というワードを頂いたのですが、農業をしている者としては大変ありがたいと思っております。山科で農業と言いますと、勧修寺のぶどうが頭に浮かびます。資料には、山科なすが載っています。今後の若い後継者が山科で農業をしていくという気になるには、どうしたらいいかということで、先程のP19の複合施設にも農業関連のスペースができたらいと思っています。

今回、1枚資料を配布致しました。明日、10月25日（木）に、京都府の主催で、「みやこめっせ」において「京の食6次産業化コンテスト」が開催されます。私たちは1次産業に携わっていますが、加工して提供するのが6次産業です。私の息子がこのコンテストに参加します。こういったことが刑務所敷地

でもできたらいいと思っており、これから農業をしていく若い人に見て頂けたらうれしく思います。

川崎会長：

農業の振興等も大きな問題です。6次産業というキーワードが出ました。地方創生では6次産業にいかに取り組むかということは重要な課題です。このように新しい形で生産性にどんどん結びついていけば活気あるものになると思います。

川中委員：

先ほどから学校関係、教育関係に関する意見が出ています。先日、京都市長から京都リサーチパークについて、御説明を頂きました。最先端技術が集まっており、420社で4200人が雇用されています。京都の西で脚光を浴びています。刑務所敷地には、東のリサーチパークと呼ばれる施設が実現できればいいのではないのでしょうか。京都は観光都市であり、山科は玄関口にあたります。刑務所敷地の活用にあたっては、交通基盤が整備されることが当然だと思います。現在、色々な市町村に道の駅があります。そのような道の駅のグレードを上げて、山科の歴史や伝統産物、過去からのいろいろな展示物、京都の土産物を置きながら、道の駅的な施設を作って頂きたいと思います。観光客は、パークアンドライド、サイクルライドのように環境に優しく公共交通を利用して京都に訪れていますが、このようなブームも取り入れて頂いて、山科が京都の玄関口として全国的にも脚光を浴びるための施設も設けて頂ければと思います。

川崎会長：

地域の方の想いは、すごくひしひしと伝わってきます。第1回の懇談会に市長がお越しくださり、第2の京都リサーチパークとおっしゃっていましたが、私はもっと欲張っており、こちらを第1にしたいという風に思っています。京都リサーチパークの建物はきれいですが、緑が少なく、まだ工夫できる場所はあるかと思っています。賑わいについても、五条方面のあたりは店舗が並んでいますが、全体を通して見ると、もっと活力が生まれるような空間作りができると思います。御指摘いただいた道の駅のような物産、交通情報を集めたようなものについても、このような概念が必要だと思います。教育についても、子育てや、子どもたちなど、次の世代がいきいきするようなまちづくりに向けた御意見を頂きました。先端産業等も含めて、ベンチャービジネスに特化したものだけではなく、単一型ではない形態で刑務所敷地を活用すれば、今の京都リサーチパークをもっと超えるものになると思います。

川中委員：

私は1回目の懇談会で、山科は陸の孤島であると表現させて頂きました。刑務所がいつ移転して、これらのイメージが実現されるかわかりませんが、色々な意味で現実的な部分を直視して、これからの山科をどのようにしていくのか、近い将来のことも含めて、この場で考えて頂ければという思いもあります。

川崎会長：

各委員の皆様から、本当に多様な御意見を頂いておりますが、本日の御意見等を簡単におさらいします。

P13の柱に基づいてまちづくりを実現していくこととなります。また5つのエリアについては、刑務所敷地が1つの契機にはなりますが、活性化に向けて山科全体をいかに繋げていくということが重要です。プロムナードの問題、品格のある骨格をしっかりと作るということについては、委員の皆様にご賛同頂けたと思っています。刑務所敷地の活用案については、多様な御意見を頂きました。山科のまちづくりのポテンシャルは大変高いということでした。山科の第二の拠点として、賑わいを増し、拠点同士が結ばれ、人の流れができていきいきすれば、まち全体が活性化していきます。山科区内の学区の自治連合会の会長の皆様からは、活用にあたっては、近隣住民の方が過ごしやすいオープンスペースや、災害時の避難所を用意してもらいたいという御要望がありましたので、受け止めて、ぜひ反映させて頂きたい。防災機能や生活の潤いのある空間に加え、色々な機能を多様に取り入れるということになるかと思っています。「多様性」

の実現は、大変な事業と思います。サステナブルということも含めて連携させていくことが必要かと思えます。資料P19については、自治連合会会長の皆様からの御意見にもありましたように、周辺の道路や交通基盤の問題、混雑緩和等、交通の問題は結構重要であると思えます。周辺道路の整備のあり方、環境との調和をどのようにするのか、都市計画と合わせて慎重に検討する必要があると思えます。概ね、このような資料を基礎にしながら、委員の皆様からは、教育、基礎科学等、色々なキーワードを出して頂きましたので、これらを踏まえて、事務局で資料をブラッシュアップして頂ければと思えます。

(2) 今後のスケジュール

事務局：

(資料4の説明)

第3回の懇談会の日程につきましては、速やかに調整し、委員の皆様にご連絡をさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

5. 山科区長あいさつ

堀池区長：

川崎先生をはじめ、委員の皆様には、長時間にわたって熱心に御議論を賜りまして誠にありがとうございました。今、議論を聞かせて頂きまして、感想を一言で申し上げますと、本当にワクワクしております。素晴らしい、山科の明るい未来を語って頂けたと思っています。少しお時間を頂いて、個人の感想を申し上げたいと思います。P19の話が中心になるかと思いますが、5つの機能すべてが実現すれば良いのですが、さすがにそれは難しいかと思えますので、どれとどれに取り組んで行くかということについて、区民の皆様全体で議論が深まればうれしく思います。冒頭、川中委員から、山科区から子育て世代で転出される方が多いというお話がありました。参考になるかどうかはわかりませんが、教育の話も出ていましたので、東京の足立区の事例についてお話させて頂きたいと思えます。足立区は、東京23区の中で最も治安が悪いと思われている行政区です。ところが、人口あたりの刑法犯罪認知件数を見ますと、実は、真ん中よりも良い状況にあります。「東京で最もヤンキーが多い」というような悪いイメージを持たれています。その足立区が昨今、大きく変貌しています。東京芸術大学等5つの大学の誘致に成功したことで、まちに学生が増えて若返り、おしゃれな店もできて、子育て世代が分譲マンション等に多く引っ越しされています。もともと鉄道も複数乗り入れて交通アクセスが良かったこともあったと思えますが、やはり大学が移転して来たことが大きかったと思えます。特に北千住は今や首都圏での住みたいまちランキングの上位に来ています。何かがまちに來ることで大きく変貌するという1つの事例ではないかと思えます。先端産業の研究という議論がありましたが、こちらも非常にワクワクする話です。そこで私は、川崎先生がおっしゃったように、キーワードは2つあると思っています。1つめのキーワードは「オープン」です。刑務所の今の場所だけがよくなるということではなく、垣根を取っ払い、良いことが山科区全体に波及することがすごく大事だと思えます。研究機関で言いますと、世界最先端の研究が行われ、山科区全体に波及するのはもちろん、その研究成果を移転してどんどんベンチャー企業が集積したり、雇用が生まれたり、ということが起これば素晴らしいと思えます。

もう1つのキーワードは「ダイバーシティ」、多様性だと思えます。京都には、京セラ、日本電産、村田製作所等多くの世界的な企業があります。また京都には40近くの素晴らしい大学がありますので、世界中から研究者に来てもらって研究して頂くことができます。人類が一番求めているものは健康だと思えますが、ライフサイエンスや医療だけにとどまることなく、色々な分野の研究が行われ、さらには芸術や

文化、宗教までも含んだ様々な人が集まることにより化学反応が起こり、画期的なイノベーションが生まれるということがあれば、本当に素晴らしいと思います。そこで、初田先生もおっしゃっていたAIを始めたとしたICTがそれらをすべて繋いでいく鍵になると思います。

少し脱線しますが、今、トヨタが非常に焦っておられるように感じています。あの世界のトヨタが、ソフトバンクと提携されたという報道がありました。トヨタのライバルは、今やフォルクスワーゲンやGMではありません。グーグルやアマゾンがライバルで、それらを脅威に思っておられるということです。これからは、データを押さえた者が勝つ時代です。そういう時代ですので、ICTをキーに、多様な研究が行われて、イノベーションを生み出し、そこから経済や雇用が良くなり、教育にも波及していくと素晴らしい、と考えております。以上はあくまで個人的な意見ですので、このようなことをフリーに委員の皆様をはじめ、区民の皆様にも議論を深めて頂けるとうれしく思います。いずれにしましても、今後取組を進めて行くにあたり、夢を共有する必要があると思いますが、夢で終わらせるのではなく、ぜひ夢を実現できるように委員の皆様をはじめ、住民の皆様、企業や大学の皆様と夢を共有し、実現に向けて連携して進めていけたらと思いますので、どうぞこれからも御指導頂きますよう、お願いいたします。本日は誠にありがとうございました。

6. 閉会

事務局：

これを持ちまして、懇談会を閉会させていただきます。
皆様、本日は、どうもありがとうございました。

以上